まりーちゃんとひつじ

フランソワーズ　文・絵　与田　準一　訳
岩波書店　１９５６年　６７２円
１冊　２１×１７cm

まりーちゃんは、ひつじのぱたぽんに言います。「ぱたぽん、おまえはいつかこどもを１ぴきうむでしょう。わたしたち、その毛をうって、すきなものがなんでもかえるわね」。ぱたぽんは「ええ、こどもが１ぴきできるでしょう。わたしたち、ふわふわの毛をたくさんつくってあげますよ」と答えます。では、こどもが２ひきだったら、３びきだったら？まりーちゃんは話す度に、買えるものを想像するのですが、さて、ぱたぽんは何と答えるのでしょう。繰り返される歌のような会話や数遊び、シンプルな描線とあたたかな色づかいが実に楽しく、まるで牧場で一緒に遊んでいるような気持ちになる絵本です。

もりのなか

マリー・ホール・エッツ　ぶん・え
まさき　るりこ　やく
福音館書店　１９６３年　９４５円
４０ページ　１９×２６cm

ぼくは紙のぼうしをかぶり、新しいラッパを持って、森へ散歩に出かけました。途中で出会ったらいおん、ぞう、くま･･･動物たちが、みんなぼくの散歩についてきます。おやつを食べて、たっぷり遊び、ぼくはかくれんぼうのおにになります。「もういいかい！」と目を開けると、そこにいたのは？小さな子どもの抱くあたたかな世界観と空想の広がりを、ていねいに繰り広げている絵本です。最後にお父さんがむかえにきてくれて、主人公のぼくは、安心して「またね」と森をあとにします。読んでいる小さな子どもたちも深く満足することでしょう。モノクロの絵ですが、ぬくもりに満ちて見飽きることがなく、心に残ります。続編に『またもりへ』があります。